

平成22年度
宇都宮短期大学附属高等学校入学試験問題

国 語

注 意

- 1 監督者の「始め」の合図があるまでは、開いてはいけません。
- 2 試験時間は、板書されている時間割のと通りの50分間です。
- 3 問題数は大きな問題が5問で、表紙を除いて10ページです。
- 4 解答用紙は1枚で、答え方はマークシート方式です。
- 5 監督者の指示にしたがって、試験開始前に受験番号と氏名を解答用紙のきめられた欄に書き、さらに受験番号をマーク欄にマークしなさい。
- 6 答えは、解答用紙に記載されている〔解答マーク記入上の注意〕、および試験開始前に行われたマークシート練習プリントにしたがって、ていねいにマークしなさい。
- 7 試験中に質問があれば、手をあげて監督者に聞きなさい。
- 8 監督者の「やめ」の合図があったら、すぐやめて、鉛筆をおきなさい。

一

次のそれぞれの問いに答えよ。

問一

次の――線の、(1)、(2)は他と漢字の読み方が異なるもの、(3)、(4)は例文のカタカナと同じ漢字を用いるものを、それぞれ選べ。

- (1) ア 精|神 イ 精|鋭 ウ 不|精 エ 精|密
- (2) ア 留|守 イ 留|意 ウ 保|留 エ 蒸|留
- (3) この事件は、実にキ|妙なトリックに彩られている気がする。
ア 指|キ イ 怪|キ ウ キ|贈 エ キ|画
- (4) 今週末は、勇ソウ|な武者行列で有名な景勝地を探訪しよう。
ア 構ソウ| イ ソウ|造 ウ 体ソウ| エ ソウ|大

問二

「暗示」と成り立ちが同じ熟語は、次のどれか。

- ア 確立 イ 録音 ウ 柔軟 エ 榮枯

問三

次の慣用句の [] に入る語は、後のどれか。

虚勢を [] 。

- ア 出す イ 持つ ウ 守る エ 張る

二

次のそれぞれの問いに答えよ。

問一

次の例文の――部と同じ意味の「な」を含むものは、後のどれか。

- 人間は、からだは元気な|ときほど、気持ちもおおらかな|になる。
- ア リビングの机には、あの花びんを置きた|いな|と考えている。
- イ 彼はいつでも誠実な|ので、みんなから好感をもた|れている。
- ウ 彼女の最晩年の絵は、才気に満ちあ|ふれたものな|のです。
- エ 「赤くて小|さな|花が好きなのよ。」と、母はいつも言|っている。

問二

次の例文の [] に入る語として適当なものは、後のどれか。

[] 大の親友でも、ぜ|つた|いに許|せない|ことがある。

- ア まる|で イ ま|さ|か ウ い|く|ら エ い|っ|そ

問三

次の――部の動詞の中で、「他動詞」はどれか。

- ア 海鳥が、しきりに海面近くの小魚を捕|え|ようとしている。
- イ 今朝起きた時|には|すでに、天気は急激な下り坂だ|った。
- ウ 登山者がなだ|れに|遭遇し、連絡が絶|えて|しまったらしい。
- エ 今年もまた湖に、多くの渡り鳥が集|ま|ってくる季節がきた。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

今は昔、高忠(たかただ)といひける越前守(えちぜんのかみ)の時に、いみじく不幸なりける侍(侍)の、夜昼(よひひら)まめなるが、冬なれど、帷(たもと)をなむ着たりける。雪のいみじく降る日、この侍、清めすとて、ものつきたるやうに震ふを見て、守、「歌詠(うたよ)め。をかしう降る雪かな。」といへば、この侍、「何を題(た)て仕(つか)るべき。」と申せば、「裸なるよしを詠め。」といふに、震ふ声を程もなくささげて詠みあぐ。(詠みあぐ)

へども消えせざりけり」と詠みければ、守、いみじくほめて、着たりける衣(きぬ)を脱ぎて取らず。北の方も哀れがりて、薄色の衣のいみじう香ばしきを取らせたりければ、二つながら取りて、脇(はら)に挟(はさ)みて立ち去りぬ。居並(いみな)みたる侍ども、見て、驚(おど)きあやしがりて問ひけるに、かくと聞きてあさしましがりけり。(驚きあやしがりて問ひけるに、)

(注1) 越前守||現在の福井県の国司。
(注2) 帷||裏地のない布一枚だけの衣服。

問一 まめなるが、程もなくささげての本文中での意味は、それぞれ後のどれか。

- (1) (a) まめなるが (b) 程もなくささげて
ア 気配りが細やかな侍が
イ 歌ばかり詠んでいた侍が
ウ 越前国に住んでいた侍が
エ まじめに働いていた侍が
オ 程もなくささげて
ア わざと節回しをつけて
イ そのまま包み隠さずに
ウ ただちにはりあげて
エ なんとかしぼりだして

問二 ① 見て、取りて、とあるが、それぞれの主語の組み合わせとして適当なものは、次のどれか。

- ア ①高忠 ③不幸なりける侍
イ ①高忠 ③北の方
ウ ①北の方 ③高忠
エ ①不幸なりける侍 ③高忠

問三 裸なる……消えせざりけりとあるが、「白雪」に具体的にたとえられている内容として適当なものは、次のどれか。

- ア 高忠の高潔な生き方
イ とても不幸な侍の白髪
ウ 色白な北の方の容姿
エ 老境にさしかかった侍

問四 驚きあやしがりて問ひけるに、とあるが、その理由として適当なものは、次のどれか。

- ア 越前守の無理難題に対して、すぐさま歌を返せたから
イ 侍の詠んだごく平凡な歌を、高忠がたいそうほめたから
ウ 北の方が侍に贈った衣服からは、芳香が漂っていたから
エ 侍が、身分不相応な高価な衣服を抱えて帰ってきたから

問五 本文に描かれている内容として適当なものは、次のどれか。

- ア みごとな歌を詠んだ侍に、高忠夫妻は二人とも衣服を与えた。
イ 高忠は、薄着であることからかうために侍に歌を詠ませた。
ウ 侍は自ら好んで薄着をしているため、高忠の衣服を拒んだ。
エ 侍所にいた侍たちはみな、すばらしい歌を聞いて感激した。

四

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

『徒然草』は、鎌倉時代の後期、一三二〇年頃から一三三一年頃
の間に、吉田兼好によって書かれた随筆で、序段と二百四十三段か
らなる。『枕草子』(清少納言)と並んで、わが国の随筆文学の双璧
と称されている。

しかし、① たいていの人は、古典の授業においては習うものの、その後は、ほとんど『徒然草』をひもとくこともなく、人生を送ることになる。 ② それにもかかわらず、いまなぜ『徒然草』を取り上げようというのか。

『徒然草』は、仏教的無常観にもとづいて、自然、人生、社会のさまざまな事象を、自由に書き記したものとされている。

冒頭の序段は、「つれづれなるままに、日くらし、硯にむかひて、心に移りゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ」(することもない寂しさにまかせて、一日中机に向かって、心によぎるたわいもないことを、とりとめもなく書きつけると、妙に気が変になりそうな感じがする)という言葉からはじまる。

しかし、この冒頭の文は、単純に仏教的な諦観を表わしているの
であろうか。

「あやしうこそものぐるほしけれ」(妙に気が変になりそうな感じがする)とは、いかにも悟りきった僧侶の言葉ではない。「Ⅰ」

そんな兼好の、「筋繩ではいかなことを示すのは、好んで賭け
事の話を取り上げることなどもわかる。」Ⅱ

たとえば、『徒然草』の第一百段では、このようにいつている。

双六の上手といひし人に、その手立を問ひ侍りしかば、「勝たんと打つべからず。負けじと打つべきなり。いづれの手か疾く負けぬべきと案じて、その手を使はずして、一目なりともおそく負けべき手につくべし」と言ふ。道を知れる教へ、身を治め、国を保たん道も、またしかなり。

つまり、双六の名人に勝つためのコツをたずねると、「勝とうとして打つてはいけない。負けないように打つことだ。どの手が早く負けてしまふかと考え、その手は避けて、一目であっても、遅く負けような手を選ぶべきだ」と語っている。「Ⅲ」

勝負事の名人の話を紹介して、そこからいろいろなることに応用できる「上達の技」を論じているのだ。

このように世俗の知恵を、非常に高く評価しているところが、兼好の面白さである。

『徒然草』を「上達論」として読むとき、現代に生きる私たちに
も大いに役立つヒントを引き出すことができる。「Ⅳ」

『徒然草』の魅力は上達の技を学べるというだけにとどまらない。

『徒然草』の底流には、兼好の鋭い視線が一貫して流れており、彼の目を通すことによつて、人生をずっと深く味わうことができる。

世の中に対する見方や自分が生きている意味を、ガラリと変えてしまうような鋭い視点が貫かれているからである。

人は、日常生活の中で、「どうしたら幸福になれるか」と考え、つねに「幸・不幸」に重きを置いて生きているようなところがある。

私たちは、自分の人生の「幸・不幸」を、試験の点数のようにとらえて、百点満点のうち、仕事生活が何点で、家庭生活が何点で、そのほか何点というように評価しているのではないだろうか。

(a)、総合点として、ほぼ八十五点程度を獲得しなければ幸せになれないなどと考えたりしているところがある。

具体的に点数化しないまでも、自分の人生の評価を、みんなの平均の「幸せポイント」よりも高いか低いか比べるようなところがある。(b)、いつも何とか「幸せポイント」を加えようと汲々としている。そこから、「あのような生き方でなければいけない、いまのような生き方は悪い」などと、生き方に序列をつけたりすることに^⑥なり、そうした価値観に縛られている。

ところが、兼好はそのような視点に立たない。兼好は、人間にとって、幸福こそ大切だと考えているわけではない。ものの方一つを変えるだけで、幸・不幸などは、いとも簡単にひっくり返ってしまふ、というのである。

『徒然草』では、どの段が重要だといった序列をつけずに、たんと第何段、第何段と並列して書かれている。(c)、兼好が何を趣深いと感じたのか、何を嫌だと感じたかななどを、さらりとした口調で言い切る。

たとえば、第十一段にはこんな話がある。

兼好が山里に入ったときに、木の葉に埋もれている風情のある家を見た。そのとき、兼好は一瞬、この家に住む人を思い、「こういう生き方もできるのだな」と感心した。

(d)、たわわに実っている蜜柑の大木の周りに、蜜柑がとられないように厳重に囲いがしてあるのを見て、「せつかく風情のあるいい家なのに、この木がなかつたらなあと思った」(「かくてもあられけるよとあはれに見るほどに、かなたの庭に、大きな柑子の木の、枝もたわわになりたるが、まはりをきびしく囲ひたりしこそ、少しことさめて、この木なからましかばと覚えしか」という。

ここで兼好は、何気ない瞬間にふとわき上がってきた感情という心のエネルギーを、見事に文章にとどめている。兼好はそうした瞬間を、一枚のスケッチのように書きとどめる。そのことを日々実践していた。

現代に生きる私たちは、どうしても現実に流され、「幸・不幸」「成功・失敗」「勝ち・負け」といったことにとらわれている。だから、自分の一瞬の心のエネルギーの流れに鈍感になりがちである。だが、「瞬間の心のエネルギーの流れ」を大切に^Eする習慣を身につけると、現実的、功利的な固定観念から解放されて、自分の心の中にエネルギーが流れるのを、生き生きと感ずることができるようになるのではないか。

それが、人生を豊かに、新鮮なものにしてくれるはずである。

(齋藤 孝「使える! 『徒然草』から」

(注1) 双壁そうへき|| 優劣なく優れている二つのもの

(注2) 無常むじょう|| 人の世の移り変わりやすいこと

(注3) 諦観たいかん|| 明らかに真理を観察すること

(注4) 汲々きききやう|| あくせく働きつとめること

問一 ① たいていの人は、が直接かかる部分は、本文中の~~~~線アからエのどれか。

ア 古典の授業においては

イ その後は

ウ 人生を

エ 送ることになろう

問二 ② ひもどく、一筋縄の本文中での意味の組み合わせとして適当なもの、次のどれか。

ア ② 写して書く ③ 尋常な手段

イ ② 開いて読む ③ 普通の方法

ウ ② 探して買う ③ 日常の方式

エ ② 改めて見る ③ 通常の手順

問三 次の一文が入るところは、本文中の「Ⅰ」から「Ⅳ」のどこか。適当なものを、後から選べ。

その道の専門家の教えは、自分自身の身を修めたり、国を治めたりする道にも共通すると、兼好は評価している。

ア 「Ⅰ」 イ 「Ⅱ」 ウ 「Ⅲ」 エ 「Ⅳ」

問四 ④ 兼好の面白さであるが、その内容として適当なものは、次のどれか。

ア 「兼好」が自由に書いた『徒然草』が、『枕草子』と並んでわが国の随筆文学の双壁と称されている点

イ 『徒然草』が、自然、人生、社会のさまざまな事象について、「兼好」独自の表現によって書かれている点

ウ 『徒然草』に好んで賭け事の話を取り上げて、勝負事に対する「上達の技」を真剣に議論している点

エ 『徒然草』に勝負事の名人の話を紹介して、それを世俗の知恵と片づけてしまわずに高く評価している点

問五 ⑤ 『徒然草』の魅力とあるが、その内容として適当でないものは、次のどれか。

ア 『徒然草』を「上達論」として読むことによって、現代に生きる私たちにも大いに役立つヒントを引き出せること

イ 『徒然草』の根底に流れる「兼好」の鋭い視点を通すことによつて、私たちも人生を深く味わえること

ウ 『徒然草』は、「兼好」が何を趣深いと感じたかに序列をつけず、たんとんと第何段、第何段と並列に書かれていること

エ 『徒然草』では、「何気ない瞬間の感情という心のエネルギー」が、一枚のスケッチのように見事に文章化されていること

問六 (a) から (d) に入る語の組み合わせとして適当なものは、次のどれか。

- ア 「a」そして b だから c そこで d だが 「
イ 「a」だから b そこで c だが d そして 「
ウ 「a」そこで b だが c そして d だから 「
エ 「a」だが b そして c だから d そこで 「

問七 ⑥ そうした価値観に縛られている。とあるが、その内容として適当でないものは、本文中の……線アからエのどれか。

- ア 日常生活の中で「どうしたら幸福になれるか」と考え、つねに「幸・不幸」に重きを置いて生きている
イ 自分の人生の評価を、みんなの平均の「幸せポイント」よりも高いか低いか比べる
ウ 現実に流され、「幸・不幸」「成功・失敗」「勝ち・負け」といったことにとらわれている
エ 自分の心の中にエネルギーが流れるのを、生き生きと感ずることができる

問八 ⑦ この木がなかったらなあと思ったとあるが、「兼好」がそう思った理由として最も適当なものは、次のどれか。

- ア 蜜柑が豊かに実ったのであれば、それを皆に分け与えるのが主人として当然なのに、逆に厳しく囲いがされていたので情けなくなつたから

イ 目の前に豊かに実った蜜柑の木があれば、誰でも囲いを作らざるを得ないのが人情であり、執着心を捨てることは本当に難しいと感じたから

ウ 山里の風情ある家の様子に感動したのに、主人が利益を最優先して、たくさん収穫できる蜜柑の木ばかりを選んで植えているのは残念だったから

エ 蜜柑の木の周りに整然と囲いがしてあるのを見て、木の葉に埋もれないように、家も手を抜くことなくきれいにしておくべきだと不満に思ったから

問九 本文中で述べられている内容と合っているものは、次のどれか。

ア 『徒然草』には、世の中に対する一般的なものの見方をガラリと変えてしまうような「兼好」の鋭い視点が貫かれている。

イ 現代に生きる私たちは、いつも「どうしたら他人より幸福になれるか」と考え、自分の人生を点数化して評価している。

ウ 『徒然草』では、「兼好」が何を趣深いと感じ、何を嫌だと感じたかの優劣を、さらりとした口調で見事に言い切っている。

エ 「瞬間の心のエネルギーの流れ」を大切に作る習慣を身につけると、固定観念から解放されて誰もが「幸福」を実現できる。

五

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

葬儀の済んだ夜、四人姉妹は誰言うともなくつつかけを履いて湖畔へ出た。

日照りつづきの真夏の夜空には満天の星が散らばり、あざやかな真つ黄色の月がぼっかり浮かんでいた。その夜空を受けて、湖は

(a) 銀色の輝きを放っている。

父は残っていたが、いよいよ故郷を失おうとしている行き場のない浮遊感の中で、私たちは声もなくたたずんでいた。

(b) 姉たちもあの写真にあったような記憶をたぐり寄せているのに違いなかった。

「埼玉に愛知に山梨と兵庫かあ。ほんとにまあ、四人姉妹、みんな (c) 思ってもみななかった人生、生きてるよねえ。」

一番上の姉がつぶやいた。

「秀一兄さんも健良兄さんも陸軍と海軍の生き残りを胸にしまって生きているし。豊一兄さんは養子の淋しさがあつたらうし。」

「時代とはいえ、七人だよ。おとうさんとおかあさん、苦労したよねえ。」

「これからがようやく二人の人生だったのに。おかあさん、何一つ楽できないで——。」

「でもおかあさん、よく言ってたよね。あんな時代をくぐり抜けてきて、七人の子どもがみんな無事だったのが何よりの幸せだって。それ以上を望んだらバチが当たる、って。」

私たちは母を語りながら、県立女学校を出て向学心旺盛だった明治生まれの母の、妻として母として家を守る者としてだけの、自己犠牲に徹した無欲な人生に圧倒されていた。

たとえ母の受けた教育がそういうものであったとしても、それ来自らの信念としてわき目もふらず一生懸命生きた母の純情は、

(d) 迷妄の中にいる私たちには、人間離れして誇り高く清らかに見えたものである。

「お茶漬けだつておいしい茎のところじゃなくて葉っぱの部分きり、お魚は尻尾ばかり、食べて。いいところはみんな人に譲るんだもの。

この人は本当に心からそれで満足しているのかなってよく思ったものだよ。」

「あのね、これだけはわたし一人の胸にしまっておこうと思つてただけ——。」

突然、一番上の姉が改まって言った。

「実はね、みんなにまだ話していない、おかあさんの最期の言葉があるの。」

母は大方一カ月を昏睡状態で過ごした。

その直前、どうしても起こしておじいさまがおいでる方角に向けてほしいと言うので姉が背中から抱きかかえてやると、震える手を合わせ、親に先立つ不幸をわびた。母の父親である茅野のおじいさんは、その時九十二歳でまだ健在だったのである。

そして、みんなにありがとうと伝えるように言い置いた母は、安

心したのかそのまま穏やかな寝息を立て、そのあとはもう心臓の鼓動とわずかな体温だけが生きている証であった。

「おかあさんらしいね。」

と私たちは言い合ったのだった。

その母がまだ何か一言をのこしているのだという。

「おかあさんの人生は失敗だった、——って。」

えっ、いま何て言ったの？ もう一度言ってみて。

「かあさんの人生は失敗だった——。」

それ、ほんとう？

心臓が止まるというのはこのことだった。

いきなり母に突き放されたのだ。後悔とか恨みとかいうような生易しいことではない。母は最期に自分の人生を否定して去った。^④父への、私たち娘への、母の裏切り。とっさに私たち娘にはそう感じられた。

「おとうさんには絶対に言えないよね。」

二番目の姉に私たちはうなずいた。

「娘は永久に救われないよ。」

ナコちゃんが鼻声で言った。

私は黙ったまま、かつて^⑤げげんに思ったことのある母とのやりとりを胸によみがえらせていた。

三人目の妊娠を電話で知らせた時のことである。母はぼつりと言った。

「郁ちゃんはやりたいたいことがあるはずだえ。ますます郁ちゃんの時

間がなくなるんだねえ。」

たしかにその時も私は母の胸の奥の一つの真相に触れたのを感じたのだ。そして無常にも私はやはり母を見過ごした。

おかあさん。おかあさん。

わたしは喉もとで母を追いかけながら、母の人生を抱きかかえて光る諏訪湖の夜のしじまに立ち尽くしていた。独りぼつちだった。

母の遺した思いもかけない言葉は、以来私の人生に張りついて三十年が経つ。

母は家庭にあつて夫や子どもを身を尽くして愛した。ふじ子という自己を生かしたい自分をだまきった。そして捨てられるものはなかった自分という〈個〉のマグマを、せめて娘たちに明かして去つたのだ。わが娘たちよ、わが娘たちよ、と呼びかけながら。

あれから私は四人目の子を産んだ。^⑧母と同じ愛と苦悩の上に〈私自身〉を生かすのでなければ、本当に母の思いの届く仇討ちにはならないと、勝手に思い定めて。

〈かあさんの人生は失敗だった〉は、私に^⑨人生を死に臨む視点から見つめることを厳しく求めると同時に、私の絶対的な人生の応援歌になった。これだけは譲れないという一線を常に教えてくれるのである。

そして、どんな人にもひそかに燃えるマグマのあることを思い知った私は、以前よりもまして、深く人の悲しみを感じるようになっていた。
(柳谷郁子「母の裏切り」から)

(注1) つっかけⅡサンダル

(注2) あの写真Ⅱ故郷の湖畔を背景に四人姉妹で撮った、幼いころの写真

(注3) 茅野Ⅱ長野県の地名

(注4) 諏訪湖Ⅱ長野県にある湖

(注5) しじまⅡ静まり返っている様子

問一 ① 故郷を失おうとしている行き場のない浮遊感とあるが、その

内容として適当なものは、次のどれか。

- ア 本来の自分を失っていくような居心地いこちの悪さ
- イ 帰るところを見失い取り残されていく孤独感
- ウ 懐かしい思い出が失われていくとする寂しさ
- エ 心よりどころが失われていくような喪失感

問二 (a) から (d) に入る語の組み合わせとして

適当なものは、次のどれか。

- ア 「a きつと b 黙々と c 常に d それぞれに」
- イ 「a 黙々と b きつと c それぞれに d 常に」
- ウ 「a 常に b それぞれに c きつと d 黙々と」
- エ 「a それぞれに b 常に c 黙々と d きつと」

問三 ② たたずんでいた^⑤ かげんにの本文中での意味の組み合わせと

して適当なものは、次のどれか。

- ア 「② ぼんやり寄りかかっていた ⑤ 不自然に」
- イ 「② ゆっくり休んでいた ⑤ 不愉快に」
- ウ 「② しばらく立ち止まっていた ⑤ 不思議に」
- エ 「② 力なく座り込んでいた ⑤ 不可解に」

問四 ③ 迷妄まいたの中③にいるとあるが、その内容として適当なものは、次

のどれか。

- ア どう生きるべきかもわからないまま、今をただ漠然と生きていくこと
- イ 日々の生活に追われてしまい、「母」から受けた教育を見失っていること
- ウ 何らかの疑問を抱きながらも、今の生活に満足して生きていくこと
- エ つらい時代を生き抜こうとして、四人姉妹がばらばらになっ

問五 父への、私たち娘への、母の裏切り。とあるが、「私たち」が

その時「裏切り」と感じた理由として適当なものは、次のどれか。

ア 「私たち」にとつて良き「母」であつて欲しいという願いが打ち砕かれて、怒りがこみ上げてきたから

イ 最期まで「私たち」をだまし続けていたことを知り、信頼していた「母」に対して憤りを覚えたから

ウ 自分の人生の失敗が「私たち」に原因があるとする「母」の言葉を聞いて、情けなく思ったから

エ 尊敬していた「母」の生き方が偽りの姿であつたことを知り、やりきれない思ひになったから

問六 母の胸の奥の一つの真相とあるが、その「真相」の内容として適当なものは、次のどれか。

ア 妻として母として家を守りたいという気持ち

イ 自己犠牲に徹した生き方をしたという気持ち

ウ 自分を生かした生き方をしたという気持ち

問七 自分という「個」のマグマとあるが、本文中でたとえられている「マグマ」の内容として適当でないものは、次のどれか。

ア 魂の叫び イ 抑えきれない感激
ウ 強い意志 エ 沸き上がる情熱

問八 母と同じ……仇討ちにはならないとあるが、「私」の決意した生き方の内容として適当なものは、次のどれか。

ア 自己犠牲を強いられた「母」の生き方を十分踏まえたうえで、「私自身」を生かす人生を送つていこうとする生き方

イ 周囲のことなど気にせず、「母」ができなかった「私自身」の生き方を、「私」は「母」に代わつて続けていこうとする生き方

ウ 「母」の苦悩を知りつつも、「私自身」を否定した自己犠牲の生き方の中に価値を見出していこうとする生き方

エ 「私自身」を生かすという生き方は今ではあたりまえになっているが、それを軽く考えずに大切にしていこうとする生き方

問九 人生を……応援歌になった。とあるが、その理由として適当なものは、次のどれか。

ア 死ぬことが怖くなくなり、何かに挑戦するために自分の人生を犠牲にする覚悟ができてくるから

イ 死を見つめることで自分の中にあつた欲望が消え、人生に対して気負いのようなものがなくなるから

ウ 自分の死を見つめることは、現在の生を大切にすることであり、より良い人生を送るための力にもなってくれるから

エ 死に脅かされながらも、今ある人生を大切にしようとして自分自身を奮い立たせるから

